

## 事例紹介

ライティングサポートデスク (WSD)

国際基督教大学図書館のライティング支援

利根川 樹美子 氏

(国際基督教大学図書館 パブリックサービスグループ長)

国際基督教大学図書館の利根川樹美子と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

なぜ私がきょうここにいるのかを考えてみました。それは大学図書館の中にライティングセンター機能組織がある事例だからだと理解しまして、きょうのお話はこの点に焦点を当てて進めようと思います。

具体的には、大学図書館の中にライティングセンターがある場合は、なぜ大学図書館にあるのか、国際基督教大学の概要、ライティングサポートデスクの概要（ライティングサポートデスクはICU、国際基督教大学におけるライティング支援組織の名前です。）その活動とデータ、直面した困難とその対策、これからの課題、最後に日本のライティング支援への問いという内容で進めたいと思います。

早速ですが、なぜ大学図書館にライティング支援組織があるのでしょうか。日本ではICU以外にも、例えば立教大学、千葉大学等では、図書館の中にライティング支援組織があります。

アメリカの場合を調べてみました。ライティングセンターという形で独立した組織を持っているところは、例えばUniversity of South Alabama、Harvard University、MIT、Stanford University等があるようです。片や大学図書館の中にライティング機能のある場合もありまして、例えばUniversity of South Florida、Virginia Polytechnic Institute and State University等がそうです。それからDuke大学はちょっと変わっていて、ライティングセンターという独立した組織があるんですけども、私が見た限りでは、

ライティング支援のセッションを受けられる場所が3つあって、そのうちの2つが図書館に設定されていました。そういった中間的な場合もあるんですね。

例えばハーバード大学の場合、これがライティングセンターです。とてもきれいな写真で気に入りましたので、掲げてみました。

それから、もう一つ、The Virginia Tech Writing Centerの事例は、大学図書館内にライティングセンターがある典型的な事例になります。Virginia Techの場合は、Newman Libraryの2階のフロアにライティングセンターが設置されています。

というわけで、大学図書館の中にある場合とそうでない場合があるんですけども、ホームページ情報を少し調査した結果、共通点がありました。それは何かといいますと、アカデミック・ライティング指導の理念です。これはアメリカでも日本でも共通していました。佐渡島先生を初め、日本にライティングセンターを導入したパイオニアの先生方がアメリカのアカデミック・ライティングの精神まできちんと我々に伝えてくださった側面があるのではないかと思います。

ライティング指導の理念で共通の典型的なものは、Writing Process、過程を大切にすること、それからWriting Across the Curriculumということが理念に据えられていると思います。きょうは、時間がありませんので、佐渡島先生と渡邊先生の参考文献を上げることにかえさせていただきます。ご興味のある方は、こういった文献を後でお読みになるといいかと思います。

次に、大学図書館になぜライティングセンターがあるかということに話を進めたいと思います。

アメリカの大学図書館の経緯と、日本の大学図書館の経緯というのは基本的に同じです。まず、大学図書館にラーニングcommonsという場を設定する取り組みが2000年前後ぐらいから進んできて、

アメリカの事例を参考に日本の大学図書館でもどんどんとラーニングコモンズという場の設定が取り入れられてきているところです。

ラーニングコモンズとは何かといいますと、学生が長期滞在型の大学図書館で、本や雑誌などの紙媒体のものも、デジタル媒体、データベースなども駆使して、かつ、いろいろなデータベースやツール類でわからないことは専門のスタッフに聞けるというように、学習のためのあらゆる設備・機器・資料・情報と人的なサポートが得られる場、これをラーニングコモンズと呼んでいます。そして、ラーニングコモンズの機能の一つとしてライティング支援が導入されてきている。大学図書館のラーニングコモンズの中にライティング支援の組織が立ち上がる事例が発生しているということです。

そういった事例の一つで、国際基督教大学の図書館の事例をこれからご説明します。

国際基督教大学、International Christian University、ICUと略して言っていますが、小さな大学でして、学生数は全部で3,000人です。教員の数は、156名です。大体、学生18人に対して1人の教員が配されるという、少人数教育に力を入れている大学になっています。

先程のお話にも、ライティングセンターを立ち上げる際に個々の大学の教学プログラムとどのように連携するかが大切なポイントだというお話がありました。この点についてICUのライティングサポートデスクではどうかということをご説明します。

ICUは、リベラルアーツを4年かけて教育する大学です。その4年間のリベラルアーツ教育の基礎となるのが新入生全員が1年次と2年次に集中的に受ける英語教育プログラムになっています。その英語教育プログラムの名称がELAプログラム、English for Liberal Arts プログラムです。このプログラムの特徴は、大学のアカデミックな

読む・聞く・書く・話す、プレゼンテーションする、論文を書くというスキルを英語の集中教育で培っていくところです。このELAプログラムを完了した学生たちが3年生、4年生になって、より専門的な教育を受けながら日本語・英語のレポートや、卒業論文を書く、そういった4年のトータルの教育課程を歩むこととなります。そして、このプログラムと連携してライティングサポートデスクというライティング支援を構築しているわけです。

また図書館の中にライティング支援組織が置かれた要因の一つに、ICU図書館員による資料収集法、データベース検索法、二次文献情報データベースの検索法・利用方法等のレクチャーを実施してきた長い経験の蓄積が挙げられるかもしれません。個人的にはそう思っています。

ライティングサポートデスク（WSD）の概要へ話を進めます。WSDの組織的な特徴は、教養学部長と、図書館との共同での運用になっています。ただ、実質的な日常の運用は図書館が行っています。大きな枠組みにおいて両者の連携が図られています。

ICU図書館のライティングサポートデスクのマップですが、上半分が図書館の本館、下半分が新館、オスマー図書館ですが、これがラーニングコモンズの場所になります。その一角、1階のところ、赤で囲ったところにライティングサポートデスクがあります。

ライティングサポートデスクの立ち位置と申しますか、それをちょっと考えてみました。申し上げたように、図書館の中にライティングサポートデスクがあって、教養学部長との連携で行われている。そして、ライティングサポートデスクの試みというのは、ICUという大学全体の教学プログラム改革の一環として行われています。

そして、その向こうに地球儀を書いておきました。今、皆様も多分ひしひしと感じられていると思いますが、世界の動向、世界標準、そういつ

たことを我々大学人も考えて、自らの業務に率先して取り組んでいくという時代になってきております。そのことを地球儀で示してみました。

ライティングサポートデスクの主な対象は、日本人学部生の日本語、英語のレポート、卒業論文です。それから、ノンジャパニーズの学部生の英語、日本語の卒業論文・レポート、また大学院生のレポート・論文も、要望があれば受け付けております。

ライティングサポートデスクの仕組みですが、40分のセッションで、その前10分と後の10分でチューターは準備をして、セッションが終わった後はチューターレポートを記入します。学生にはセッションの満足度アンケートに答えてもらいます。最終的な情報収集、集計、分析、報告、広報活動などを我々ライティングサポートのスタッフが行っています。

ライティングサポートのスタッフは4名ですが、同時にレファレンスサービスセンターのスタッフでもあります。ライティングサポートデスク関連の他の仕事としては、チューターのスキルの向上を目指すワークショップの開催、予約不要セッションゾーンの設定、講演会などに取り組んでいます。

こちらがライティングサポートデスクのホームページになります。

これまでの2年と数カ月の実績は、山あり谷ありだったんですが、2012年の春に上昇しまして、その秋にまたぐんと上昇しました。3学期制で1学期3カ月ですが、2012年の秋学期に約90件のセッション数がありました。これは、学生、教員のライティングサポートデスクに対する広報活動がある程度浸透し、理解が得られてきた成果なのではないかと考えています。

チューターの採用は、毎学期大体13名前後で推移しています。

持ち込まれた文章の執筆段階の統計は、こちら

を見ていただきますとおわかりのように、構想段階で相談にくる学生が多いことが特徴になっています。

次に、困難だった事項と対策を書きました。いろいろ細かく書きましたが、まとめますと、今まで存在しなかったライティングサポートデスクを学生や先生方に知っていただくことの困難さと要約できると思います。対策については、詳細に書きましたので、もしご興味があれば、後でござんになってください。

これからの課題は、幾つかありますが、最も大きな課題は、第1にチューターの教育体制を整備することです。なぜかといいますと、学生の満足度調査の結果、チューターのスキルの向上が学生の満足度に最も連動しているということがわかりまして、この点がやはり一番大切なんだと考えました。第2に教員の理解と協力をさらに得ることです。何を進めるにも大学で事を進めるには、これは欠かせないと身にしみて感じております。

最後のライティング支援への問いですが、実は私は図書館情報学の研究もしておりまして、隣の分野から見た門外漢としての日本のライティング支援の研究について問いを考えてみました。これは私自身への問いであって、きょう何か答えを求めようとは思っておりません。私自身がこれから問うていきたいと思っていることです。

研究領域としてのライティング指導・支援はどう評価されるのか。ライティング支援の効果効用を測定、評価する研究に求められるものは何か。それから、大学の自治の精神からは、文部省の施策をむしろ大学がリードする、これが必要なのではないかと思います。そのためには何が必要なのか、これを考えていきたい。それから、世界市場、世界標準を視野に入れるとすれば、今後、何が必要なのかも問うていきたいと思っています。

以上で私からの報告を終わります。ご清聴ありがとうございました。